重点取組 分野	令和　5　年度 具体的取組	自己評価結果	総括
生きてはたらく知	①学習の見通しをもち、人とのかかわりの中で自分の考えを伝え合う力を高め、振り返りで学びを自覚できるように、主体的・対話的な授業づくりを工夫する。②重点研究の主題を「夢や目標に向かって問題を見出し仲間と学び高め合う子ども」とし、生活科・総合的な学習の時間を中心に、課題解決力や人とかかわる力を育成する。	①人とのかかわりの中で自分の考えをもつことができる学年もあれば、自分の考えをもつに至らない学年もある。豊かな体験を通して、自分の思いをもつ学習の場を多くしていきたい。ふり返りで学びを自覚することができるようになっている。児童がより主体的・対話的に学習に取り組めるよう授業を工夫していきたい。 ②重点研究を中心に仲間との学び合いを重視してきた。人とかかわりながら切実感のある課題設定が大事であることが実感できた。	A
大空の心	①縦割り活動では、異学年の友達とのかかわりを大切にし、相手を思いやる心や役割を果たして協働する姿勢を育てる。②人とのかかわりを通して、自己有用感をもち、自分を大切にする心を育てる。③「ありがとうの会」や「感謝のつどい」、人権学習などを通じて、自分を支えてくれた方たちに「感謝する心」を育てる。	①なかよし活動を通して、異学年の友達とのかかわりをもつきっかけを作り、相手を思いやる心や、役割を果たして協働することの大切さを感じられるようにしてきた。②総合的な学習の時間の学習の中で、チームで協力したり、友達と教え合ったりして、自他ともに大切にしようとする気持ちをもてる場を設けた。③感謝の気持ちをどのように伝えるかを考え、会に臨むようにした。	B
健やかな体	①毎週水曜日の中休みに体力アップを行い、児童一人ひとりがめあてをもって取り組めるようにする。②学校保健委員会では、家庭と連携し、規則正しい生活を送ろうとする姿勢を培うとともに、手洗い等の感染防止の習慣化を図る。	①児童の委員会活動を中心に体力アップを行ったが、主体的な取り組みには至らなかった。また、新体力テストの結果をみても、市平均に比べてそれほど高くなく、意欲のもたせ方、体力の向上を実感するまでには至っていない。主体がだれであっても、子どもたちが「体力アップできた」と実感できるような方法を模索する必要がある。 ②規則正しい生活を送るための、家庭への働きかけをすることができたが、家庭ごとの認識の違いの差も大きくなってきており、さらなる工夫が必要である。	B
公共心と 社会参画	①生活科や総合的な学習の時間に、まちの「人」とかかわる学習を設定し、社会や地域にかかわろうとする心や、参画・協力しようとする態度を育成する。②まちの「人」や専門家とかかわる学習を通して、自分の生き方について考えたり、夢や目標をもったりできるようにする。	①生活科や総合的な学習の時間を中心にまちの「人」にかかわる学習を設定し、体験的な活動を積み重ね、社会参画や仲間と協力する態度が育ってきた。 ②まちの「人」や専門家だけでなくリモートなどで遠くの専門家などともかかわる学習を通して、活動が深まったり、その人の考え方や生き方にふれたりして、自分について考えるきっかけとなった。	A
いじめへの対応	①月1回のいじめ防止対策委員会で、ていねいに子どもへの支援の仕方について教職員で話し合い、いじめ防止に努める。②児童アンケートを定期的または適宜実施し、子どもの困り感などを教師が察知し、いじめの早期発見に努め、些細な変化を見逃さない体制づくりをする。	①いじめ防止対策委員会では、児童の様子を丁寧に観察報告しあい、支援の仕方を全教職員で共有することができた。②児童アンケートを、定期的にとる以外にも児童の声が上がった時点でとり、迅速に事態の把握に努めた。	B
人材育成・ 組織運営(働き方)	①7年次以下の職員を中心にメンターチームを組織し、経験豊かな教職員が講師となって月1回の活動を継続して行う。②学校づくりワーキングを実施し、全教職員で学校運営にかかわり、チーム力の向上を図る。③チーム学年経営を通して、複数の教員で児童を見守り、指導の効率化を図り、働き方改革につなげる。	①メンターチームでは、月一回の活動を継続して行い、ICTの推進や講師を呼んで特別活動についての学びを深めるなど、充実した取組を行った。②学校づくりワーキングでは、自分たちで働きを見直す機会をもち、全職員で話し合う貴重な機会となった。③級外のチームリーダーが各ブロックにいることが、担任の安心感につながった。一方で、仕事量の偏りなどには課題が残り、チーム学年経営を持続可能なものにするために、さらに働き方を改革をすすめていく必要がある。	A
地域学校協働活動	①学校運営協議会で、学校と地域の目標を共有し、まちの「人」とかかわれる学習や地域行事を通して、社会に開かれた学校づくりを推進する。②登下校の安全を見守る「安全パトロール隊」や、学習ボランティア、おはなしの会などの方たちの活動を、地域学校協働本部が推進する。	①地域の方々に子どもたちの様子を見てもらい学校経営方針について共有できた。今後も学校行事や地域行事について話合いながら、学校づくりを推進していく。②ボランティアの方々との交流会や感謝の会、祭りの運営等を通して、児童や教職員が地域と関わりを深めながら、協働していく場面が増えた。	A
児童生徒指導	①児童がすすんで挨拶ができるように、教職員が月初めの5日間に挨拶運動に取り組み指導する。②Y-Pの結果と日頃の様子から学級や個人の状態を把握し、横浜プログラムを生かして、認め合える居心地のよい学級づくりや学校づくりをすすめる。③スタンダードについて、全教職員がチームとして共通した指導を行う。	①月初めの5日間は教職員があいさつ運動に取り組み、横浜こども会議参加の児童提案から、挨拶の大切さを訴えるキャラクターを使用して、挨拶運動の活性化に努めた運動期間中の挨拶は活発になった。②Y－Pアセスメントの結果を踏まえ、個人やクラスの実態を把握し、居心地の良い学級づくりや学校づくりに生かした。③スタンダードにそぐわないことがあれば、必要に応じて話題に挙げ、共通理解に努めた。	B
特別支援教育	①一般級と個別支援学級の情報交換を定期的に行い、交流が円滑に行われるようにする。②一般級担任は、個別支援学級での交流級児童の様子を見に行き、個別級の環境整備や児童理解に務める。③障害を含めた多様性を認め、誰もが安心して授業に参加できるように、研修などを通して教育活動を見直す。	①担任間での連絡を大切したことで、交流児童がスムーズに交流することができた。②研修を通して理解を深めることができたが、児童の様子を頻繁に見に行く機会を取ることは難しかった。③特別支援教室を立ち上げたことから、多様性や合理的配慮に対する職員の意識が高まり、日々の教育活動を見なおす機会となった。	B

ブロック内 評価後の 気付き	小中一貫教育推進ブロック授業研では、小中それぞれの授業を参観することで、9年間で育てる子ども像を共有することができた。また、各教科・領域ごとの意見交流会では、9年間で育てる資質能力をテーマに情報交換をし、つながりを意識した自校の授業改善に役立てることができた。 ブロック専任会では、地区懇談会を実施して、ブロックの地域の方々と情報交換をすることができた。
学校関係者 評価	・普段の授業でマスクがはずれ、子どもたちの表情が見られるようになってよかった。授業に集中していてよく話を聞き、発言も積極的で自分の意見をよく発表している。タブレット（iPad）を十分に活用しているのがとてもよい。 ・個別支援学級の教室環境や個々への対応がとても素晴らしいので継続してほしい。特別支援教育の体制が確立しつつあり、来年度もさらに力を入れていってほしい。 ・学校評価アンケートでは児童と保護者にやや差があった。今後の学校HPやメール配信を充実させ、保護者に学校の取り組みが伝わっていくとよい。

中期取組 目標 振り返り	昨年度に引き続き、子ども一人ひとりの思いを大切にしながら、主体的・対話的な学びを充実させること、まちの「人」とのかかわりを大切にし、豊かな経験を通して、まちを愛する心を育てることを目指した。人とのかかわりの中で自分の考えをもち主体的に学び、振り返りを通して自分の力が伸びたことを認知することができる児童が増えた。体力アップについては、児童があめてをもち主体的に運動に取り組む取組にしていくために、取組を工夫していく必要がある。YPの結果などをふまえ、一人ひとりが居心地のよさを感じるクラス作りに務めた。特別支援教室を新設し、個に応じた教育支援体制が充実した。来年度も支援体制を継続していく。